

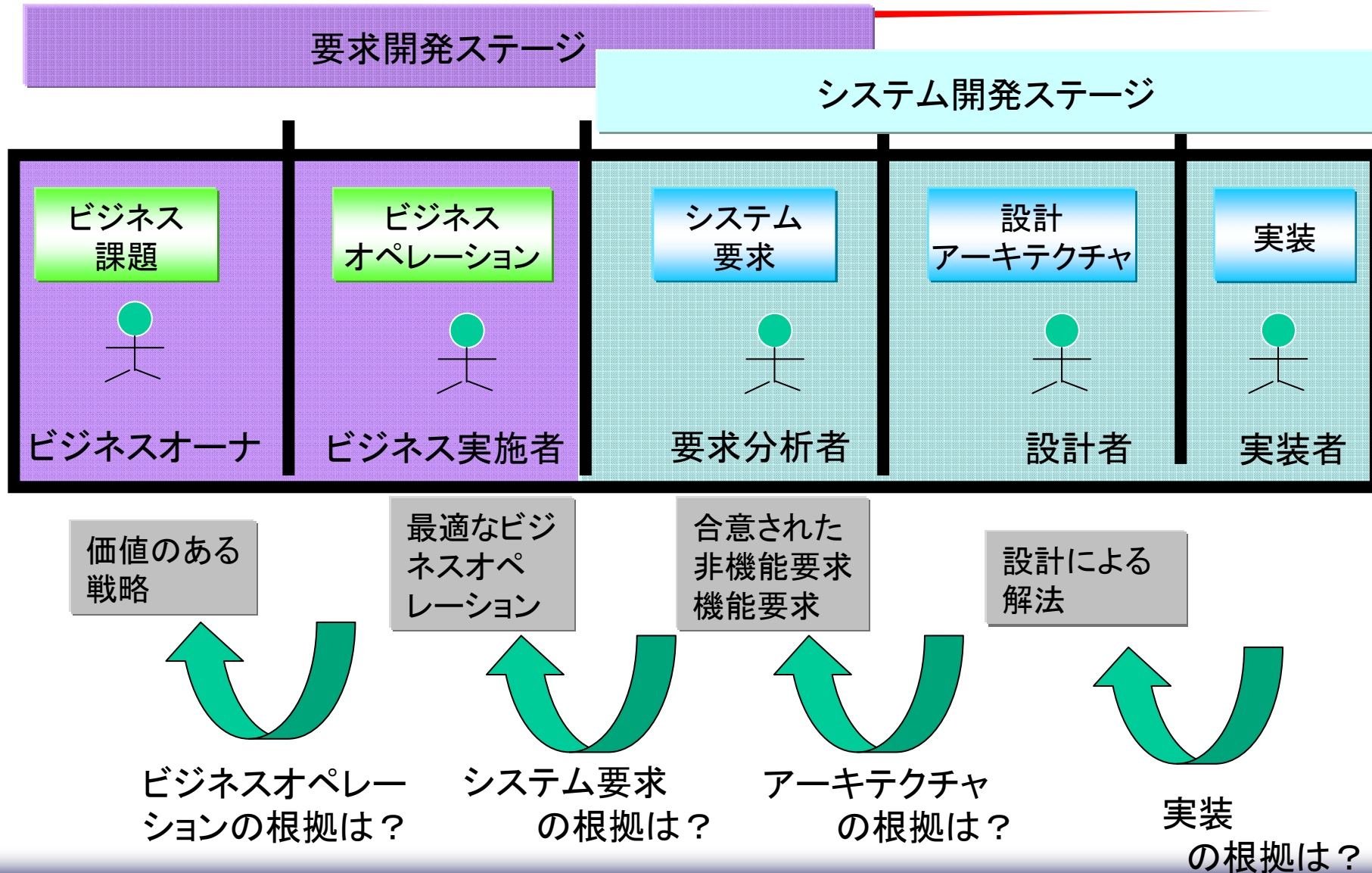


OPENTHOLOGY

要求開発アライアンス

チュートリアル
第一回「プロセス編」
萩本 順三

見えない壁を破る(役割分担による問題)



Openthology構造とモデル

ユースケース記述

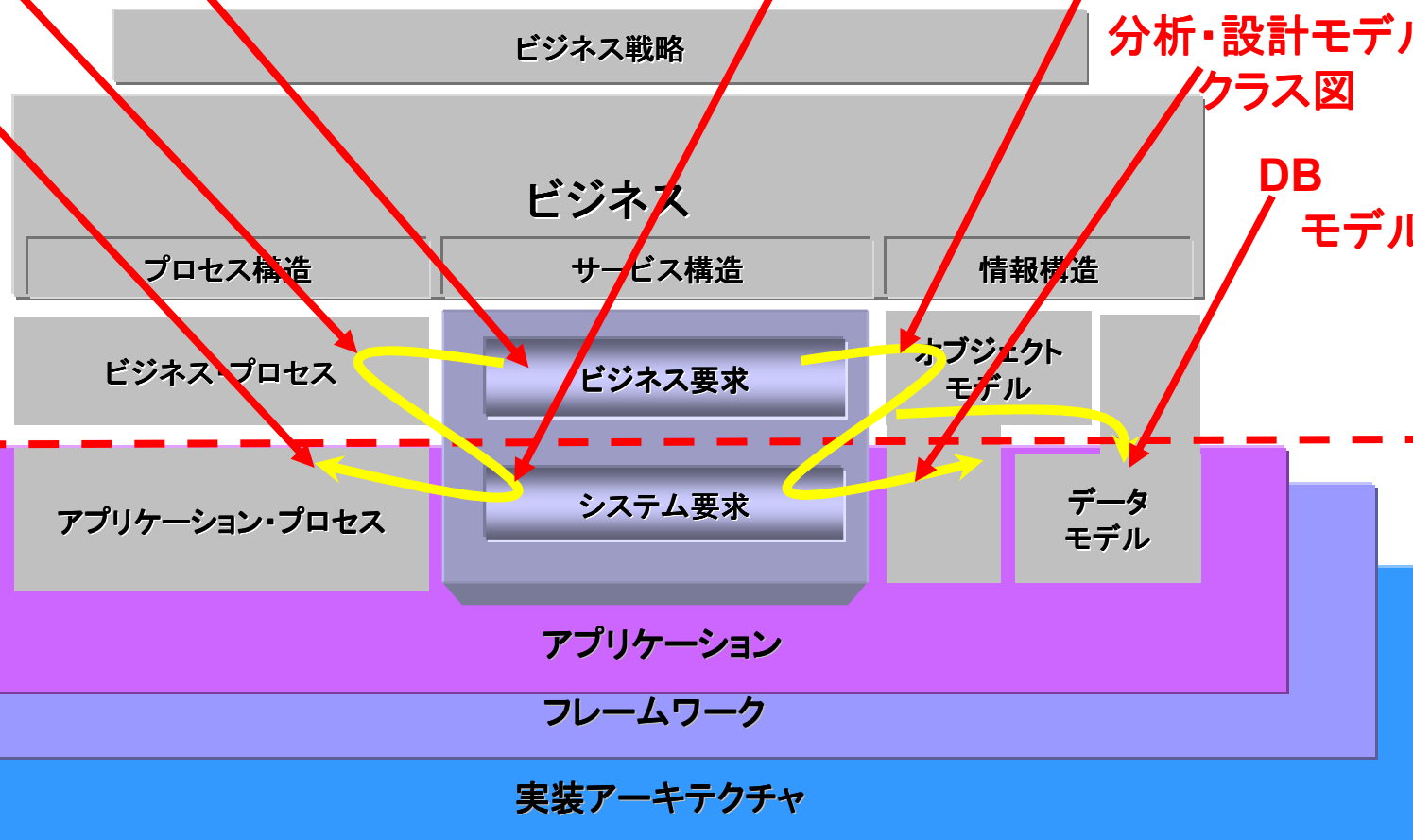
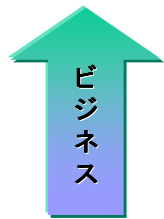
業務フロー(アクティビティ図)

ビジネスユースケースモデル ユースケースモデル

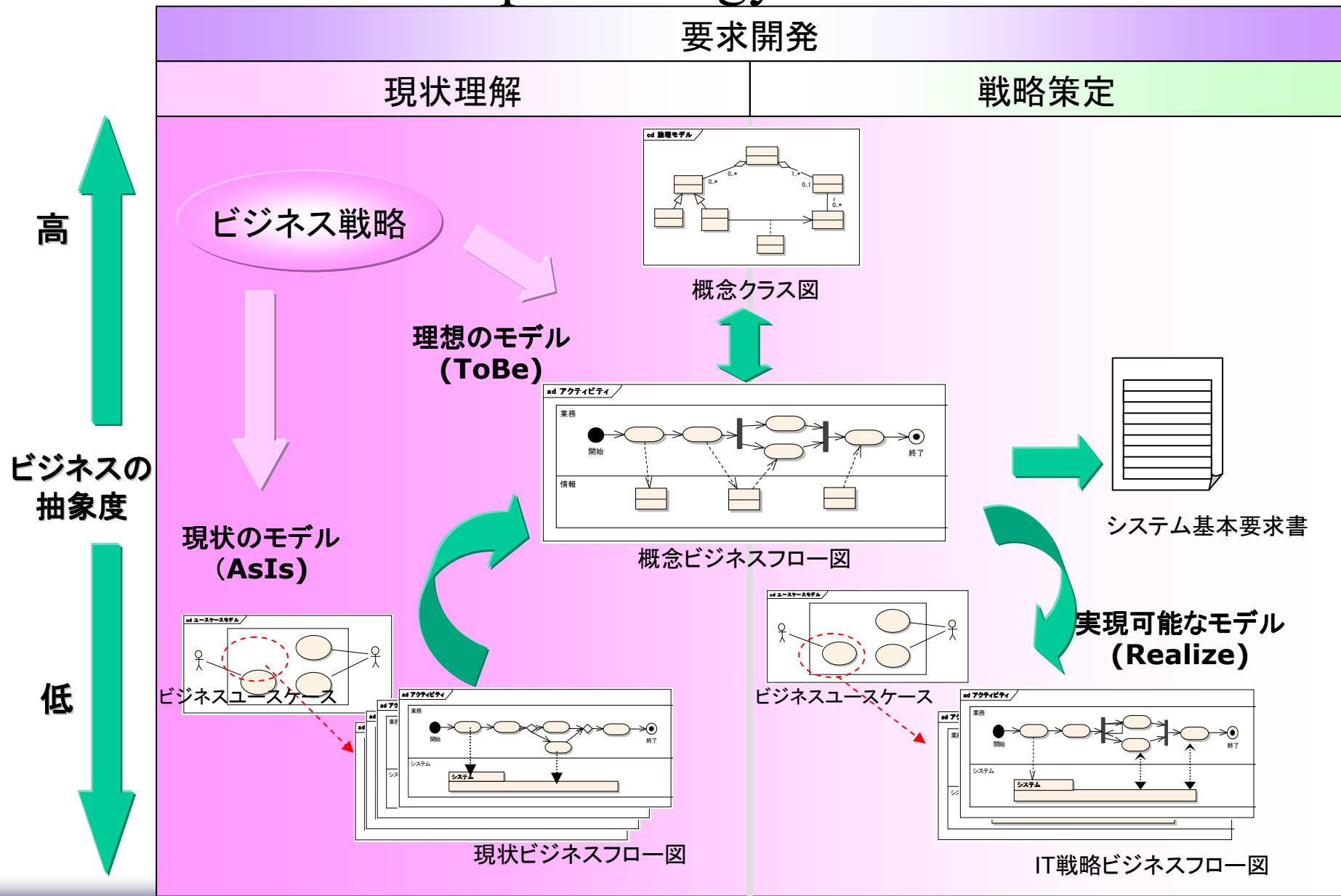
ビジネス概念モデル

分析・設計モデル
クラス図

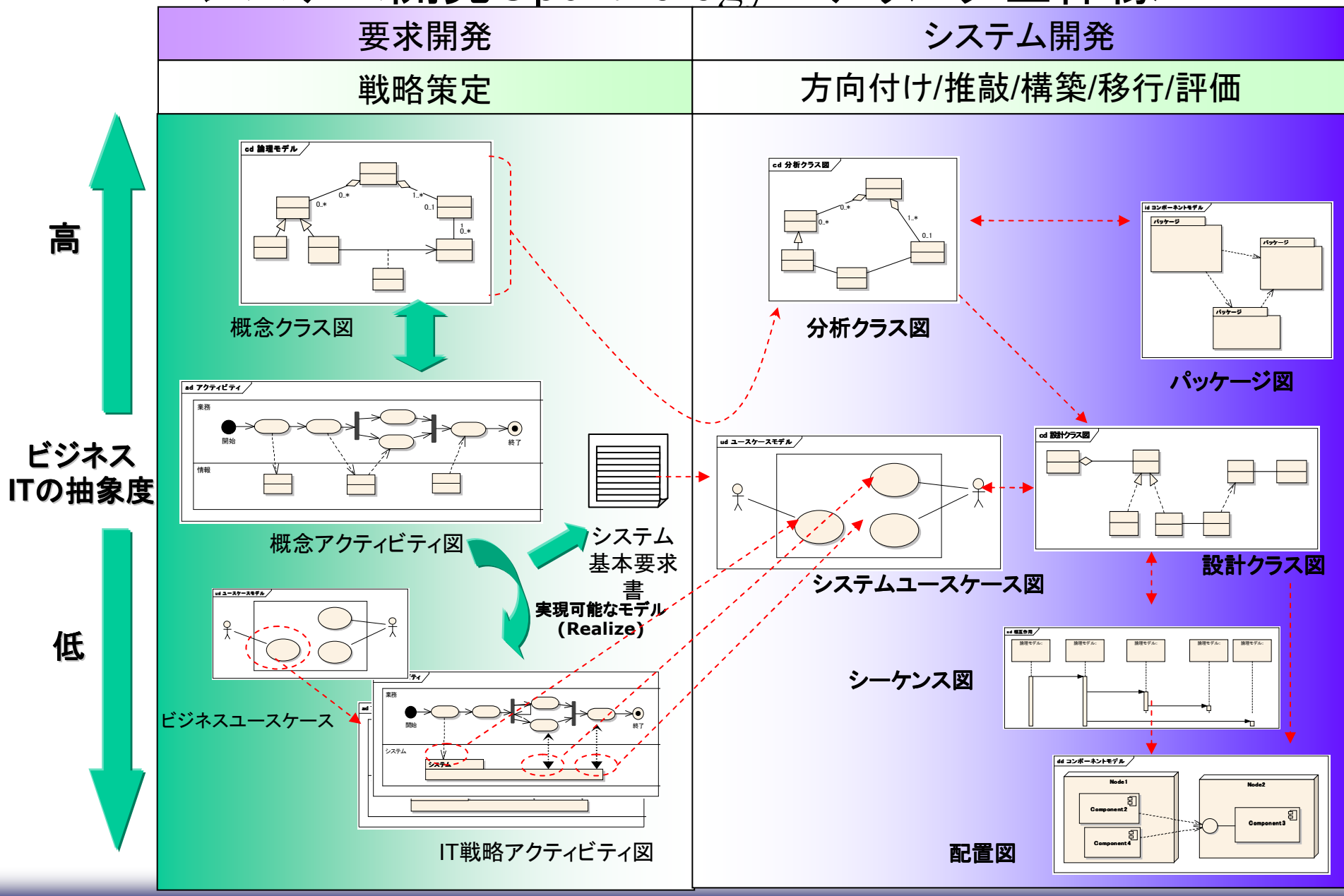
DB
モデル



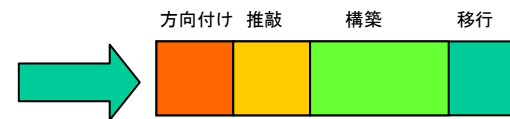
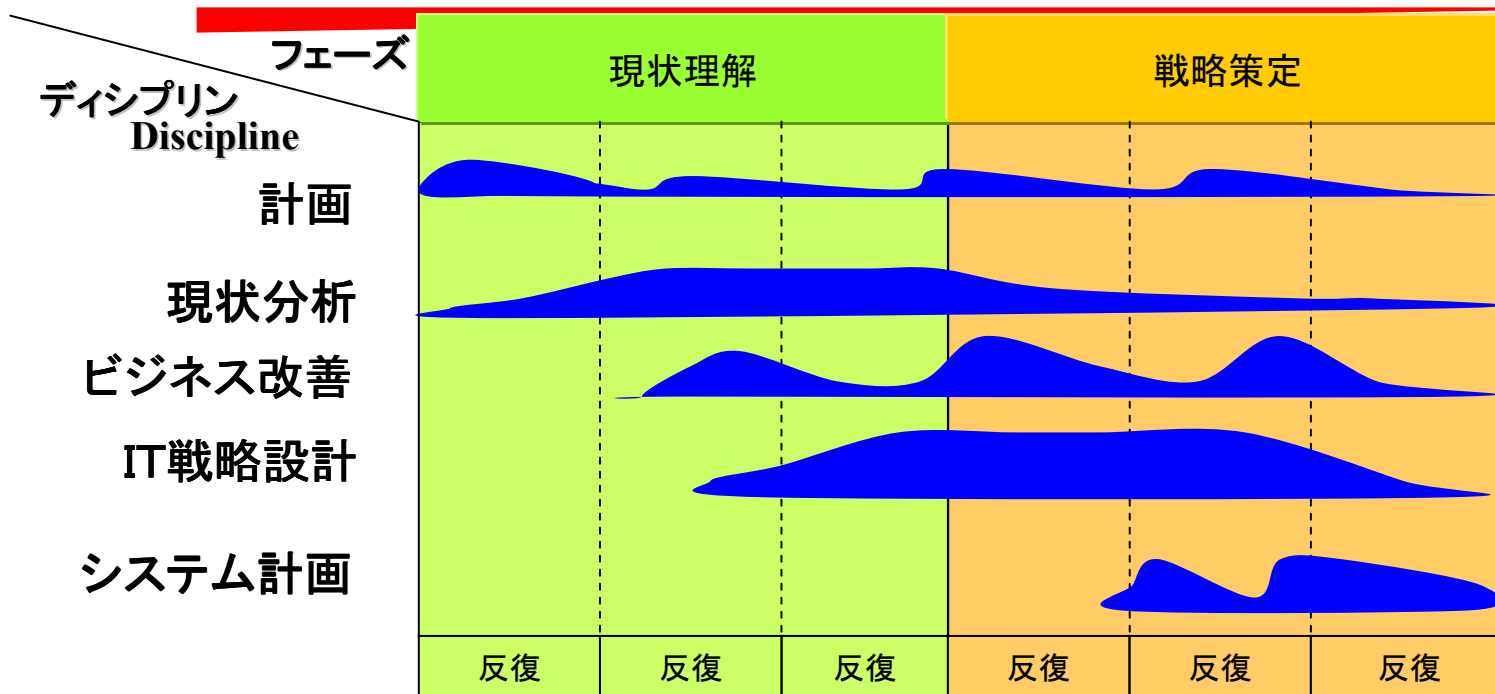
要求開発Openthologyモデリング全体像



システム開発Openthologyモデリング全体像



フェーズとディシプリン

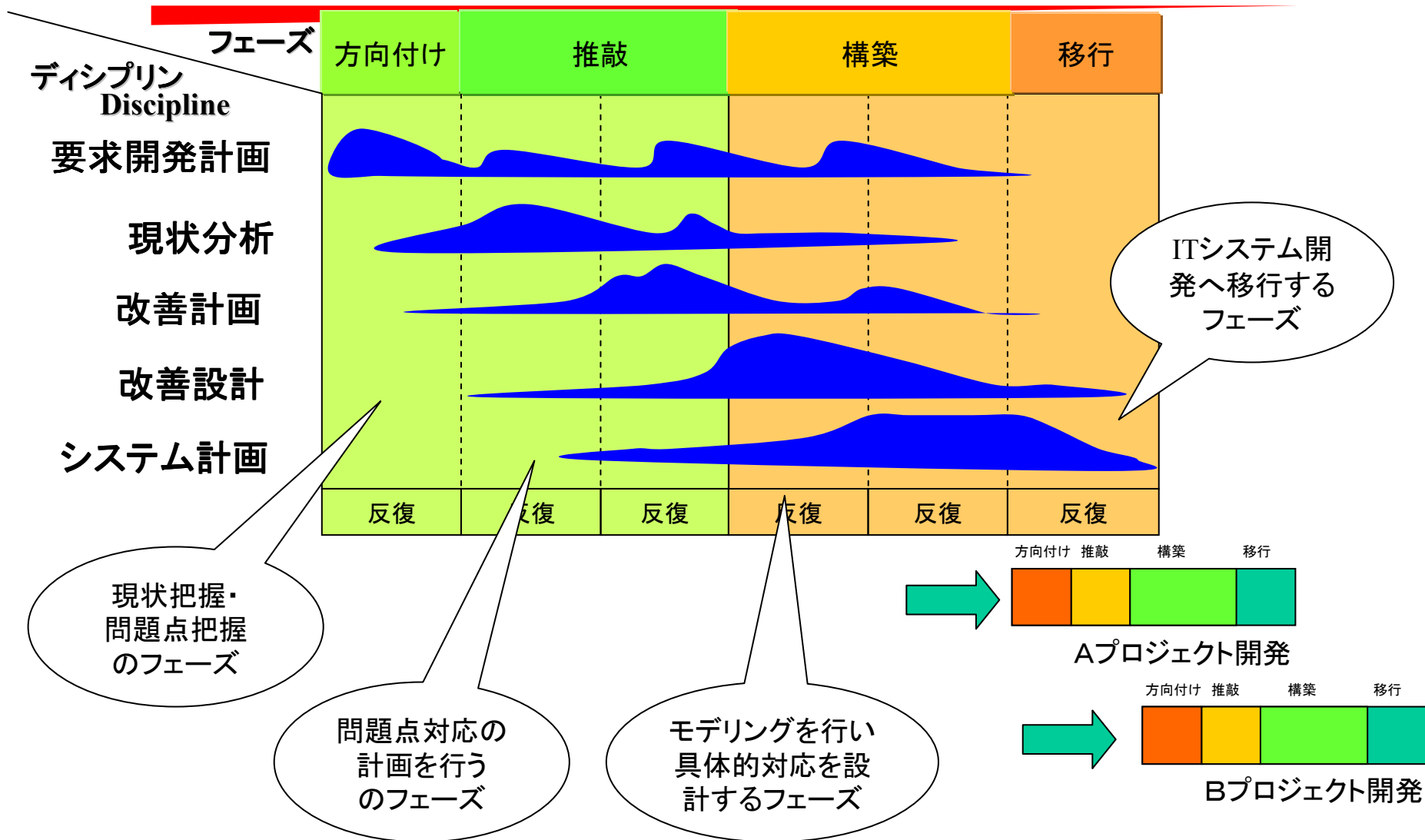


Aプロダクト開発

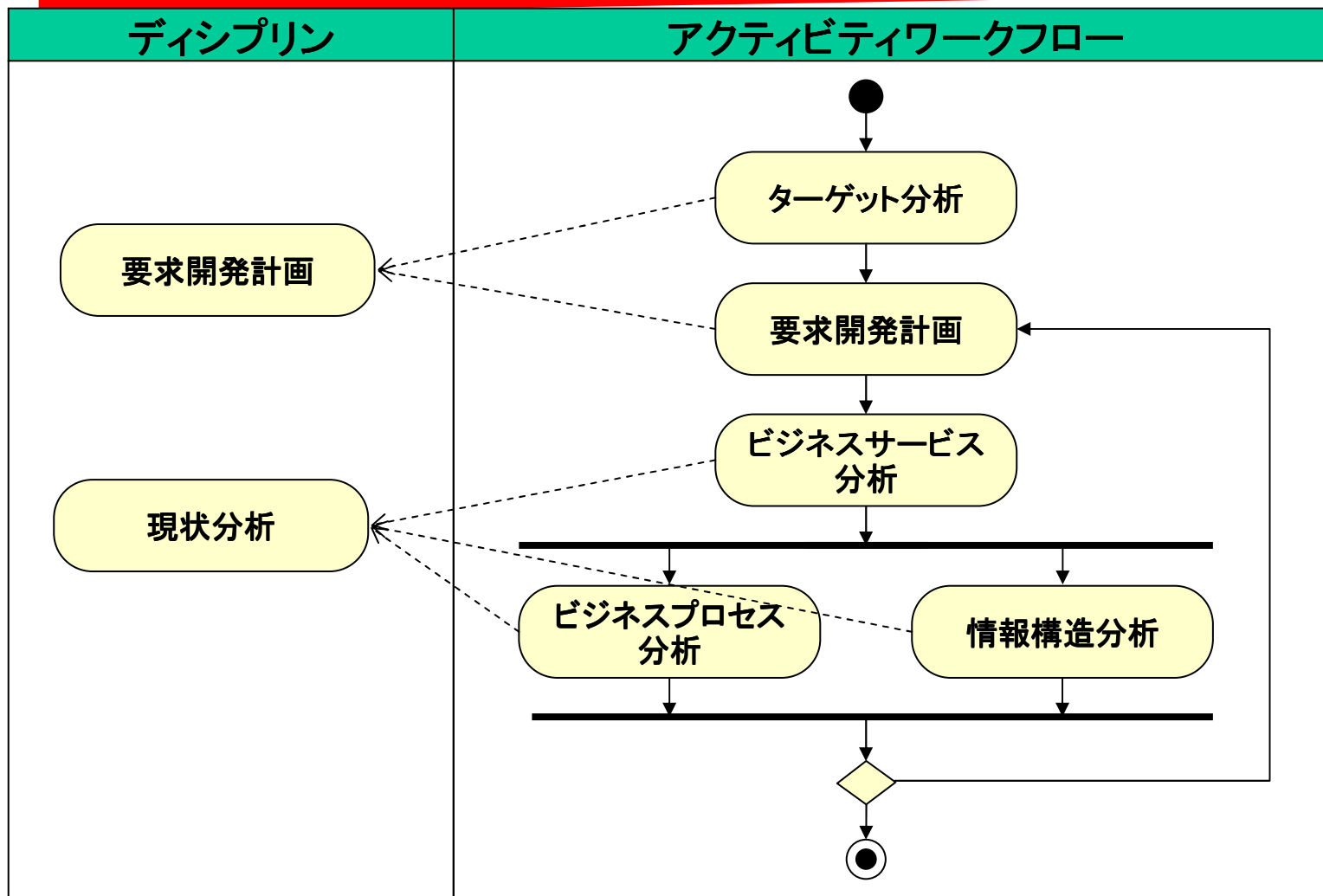


Bプロダクト開発

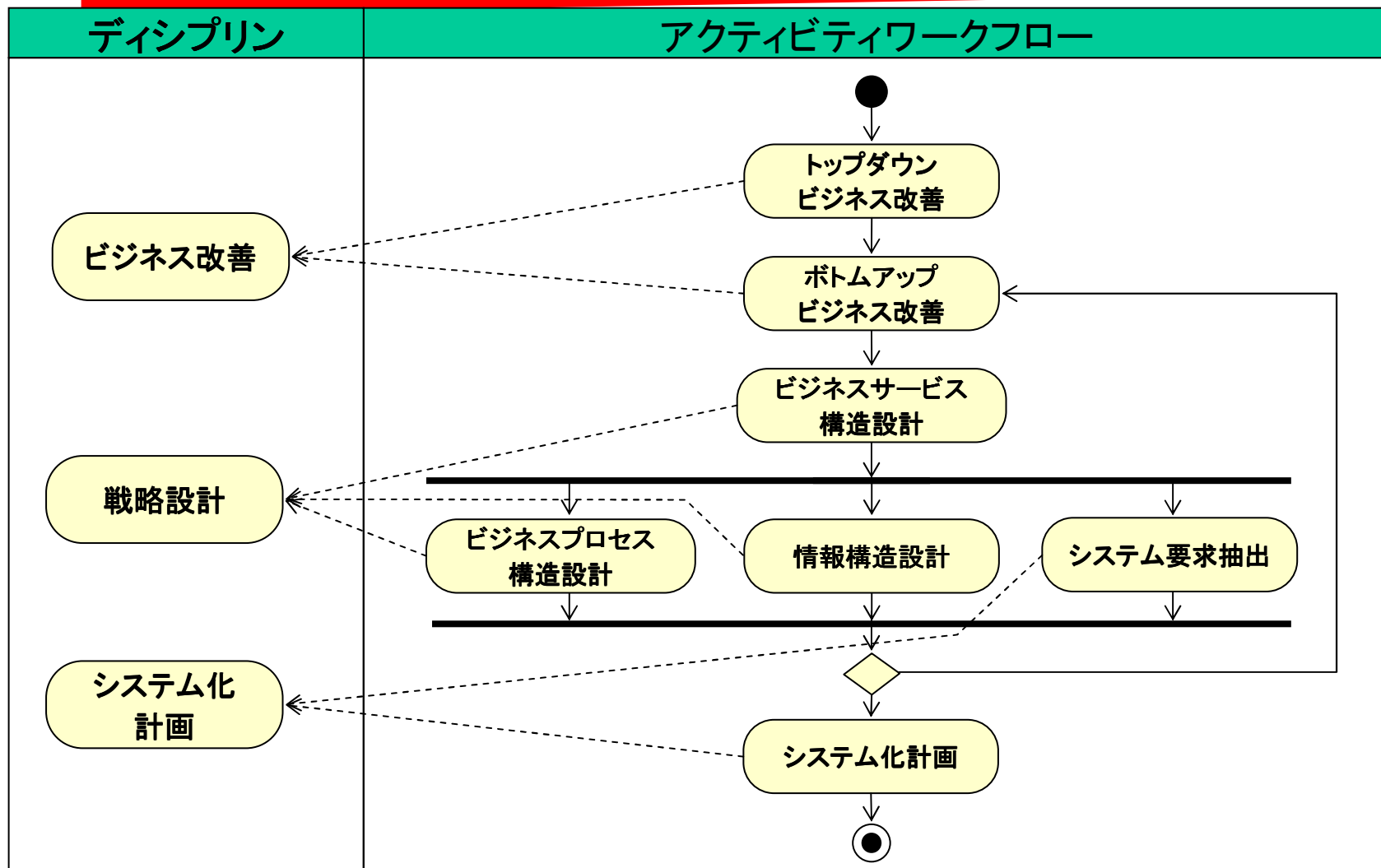
フェーズとディシプリン(案2)



ディシプリンとアクティビティワークフロー (主に現状理解フェーズに重点を置く)



ディシプリンとアクティビティワークフロー (主に戦略策定フェーズに重点を置く)



アクティビティ・成果物対応表

主フェーズ	作業分野	活動	サブ活動	アウトプット成果物	役割							
					SWAT	EMT	NST	BA	SA	MTR	OSVR	
現状理解 現状の見える化	要求開発計画	ターゲット分析	ターゲットの範囲を決める		○						○	○
			ビジネス特性を分析する	ビジョンとゴールの説明資料	○	○					○	○
			利用モデル一覧	○	○				○	○		
			ステークホルダー構成図	○	○			○	○			
	現状分析	要求開発計画	要求開発組織を計画する	要求開発組織図	○	○	○				○	○
			要求開発の基本計画を立てる	要求開発プロセススケジュール	○	○	○				○	
		フェーズ詳細スケジュールを立てる	フェーズ詳細スケジュール			○						
		ビジネスサービス分析	ビジネス組織構成図を作成する	ビジネスサービス組織図	○	○	○	○				
			ビジネスユースケースを作成する	ビジネスユースケース	○	○	○	○				
		ビジネスプロセス分析	ビジネスフローを作成する	現状ビジネスフロー	○	○	○	○				
ビジネスフローを標準化する	標準アクティビティ一覧		○	○	○	○						
戦略策定 業務改善	ビジネス改善	トップダウンビジネス改善	局所的なビジネス概念を整理する	ビジネス概念モデル(クラス図)	○	○	○	○	○			
			局所モデルを統合し整理する	用語集(一部)	○	○	○	○	○			
		ビジョン分析ツリーを作成する	ビジョン分析ツリー	○	○	○	○	○				
		ビジョン反映リストを作成する	ビジョン反映リスト	○	○	○	○	○				
	ボトムアップビジネス改善	問題分析ツリーを作成する	問題分析ツリー	○	○	○	○	○				
		問題解決リストを作成する	問題解決リスト	○	○	○	○	○				
	戦略設計	ビジネスサービス構造設計	システム要望書	○	○	○	○	○				
			新ビジネスサービス組織図	○	○	○	○					
		ビジネスプロセス構造設計	新ビジネスユースケース	○	○	○	○					
			概念ビジネスフロー	○	○	○	○	○				
情報構造設計		IT戦略ビジネスフロー	○	○	○	○	○					
		概念モデル(クラス図)	○	○	○	○	○					
システム要求抽出	用語集	○	○	○	○	○						
	システム要望を抽出する	システム要望リスト	○	○	○	○	○					
システム化計画	システム化計画	システム要求として整理する	システム要求リスト	○								
		システム要件を定義する	システム要件リスト	○	○	○	○	○				
		新システムの全体構成を決定する		○		○			○			
		開発チームを組織する		○		○			○			
システム開発を計画する	システム開発計画書	○		○			○					

ToBeかAsIsか？

- ToBe先行

- 長所

- やるべき活動が明確になり、それにあわせて改善すべきポイントにフォーカスしたAsIsが実施可能

- 短所

- 明確なAsIsを持たずにToBeを行うと現実的が問われる結果を出しやすい

- AsIs先行

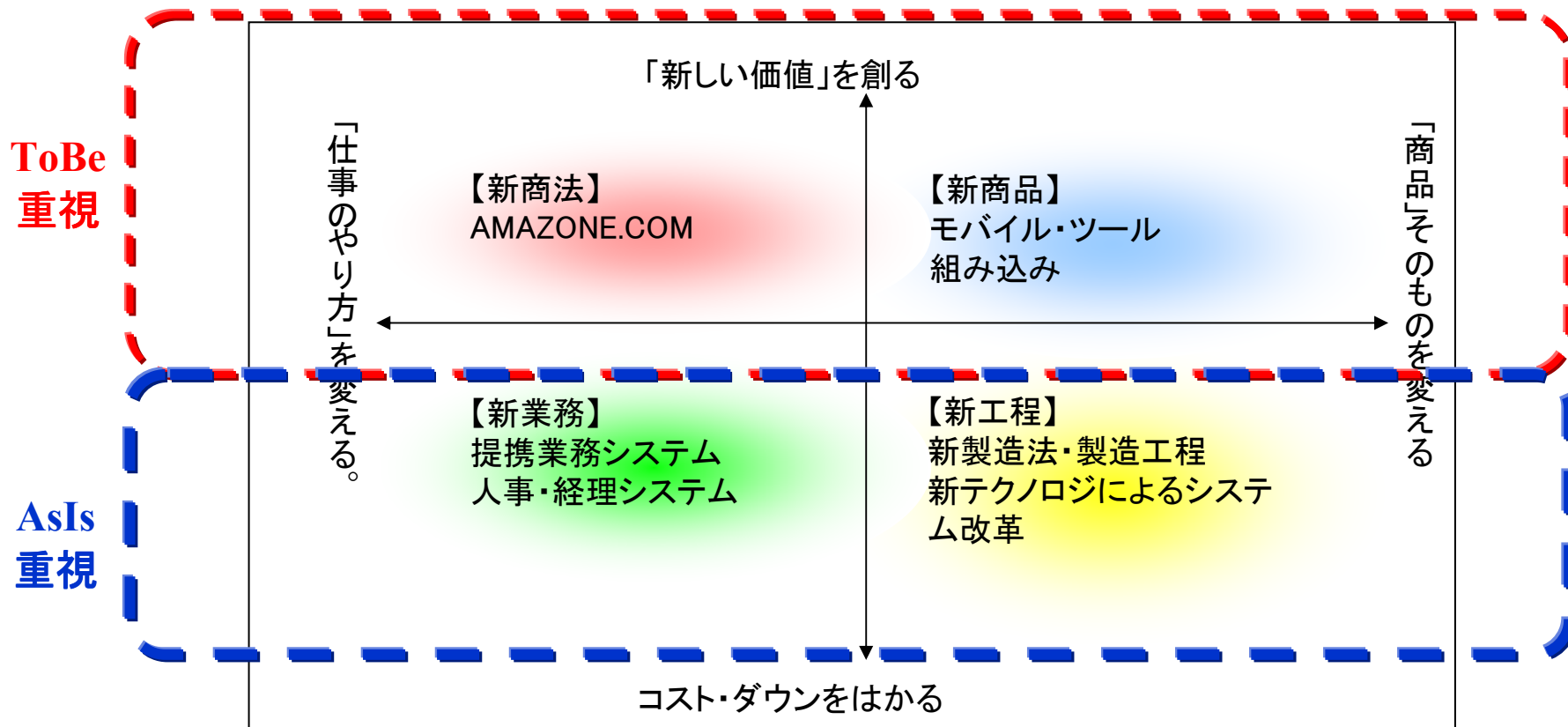
- 長所

- 現状をふまえた問題点・改善点の合意を取りやすい。特に複数部門の最適化を目指す場合は、現状の業務モデルの可視化が有効

- 短所

- 現状にとらわれすぎて、ToBeを描けなくなってしまいやすい

ToBeかAsIsか？ 開発タイプの分類



■ ターゲット分析(1)

- 目的
 - 要求開発においてステイクホルダー間で共有の作業と価値について合意を得るためのプレ分析を行う
- 概要
 - 要求開発の目的を達成するために適切なビジネスターゲットの範囲、ビジネスの特性に応じて利用するモデル、要求開発組織を定める
- 事前条件
 - 要求開発を行うための動機付けを重要なステイクホルダーに対して適切に行っている事
 - 要求開発実施責任者が決まっていること
- 事後条件
 - 要求開発スケジュールを計画するための作業内容が明らかになっている事
- サブ・アクティビティ
 - ターゲットの範囲を決める
 - ビジネス特性を分析する
 - 要求開発組織を計画する

■ ターゲット分析(2)

- 成果物
 - ビジョンとゴールの説明資料
 - 利用モデル一覧
 - 要求開発組織図
- 決定事項(ゴール)
 - ターゲットの範囲
 - ビジネス特性に応じた要求開発プロセスのコンセプト
 - 要求開発計画
 - 要求開発タスクフォースメンバー
- 組織
 - 要求開発タスクフォース(仮メンバー)
 - 要求開発実施責任者、ビジネス担当者、開発担当者、役員・部長

■ ターゲット分析(3)

• 方法

– 要求開発実施責任者を決定する

- 要求開発実施責任者とは、要求開発作業を実践するリーダーの事です。要求開発実施責任者は、要求開発の実施計画段階においてターゲット組織から最も業務改革に意欲がありスキルが高い人材が選ばれることになるでしょう。詳しくは、「要求開発組織を計画する」サブアクティビティを参照してください。

– チームを作る

- 要求開発実施責任者は本プロジェクトのキーマンとなるターゲットビジネスの担当者・開発担当者・品質管理担当者・役員・スポンサーをステイクホルダーとしてプロジェクトに参加を促します。ここで言うステイクホルダーとは、要求開発タスクフォースメンバーとして大なり小なり活動をしてもらう重要な関係者の事です。

– 目的、ゴール、役割の設定(?)

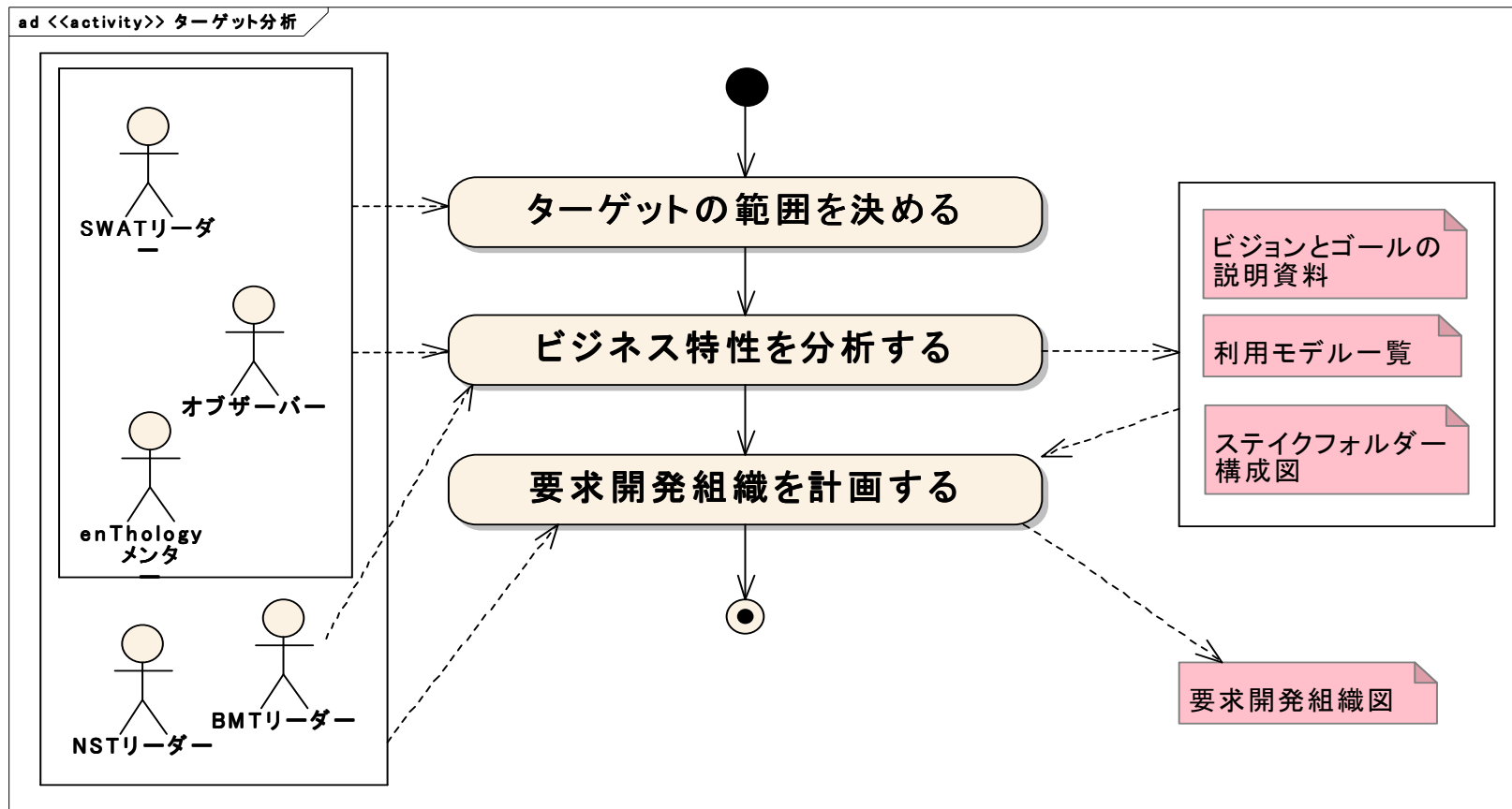
- 要求開発実施責任者は、数人のメンバーと共にステイクホルダーにインタビューを行うことで、企業戦略の取り込み、要求開発としてのゴールを明らかにし、最後にステイクホルダー間での合意を得る必要があります。このような活動は、要求開発タスクフォースの中で実施していくことになるでしょう。

• 留意点

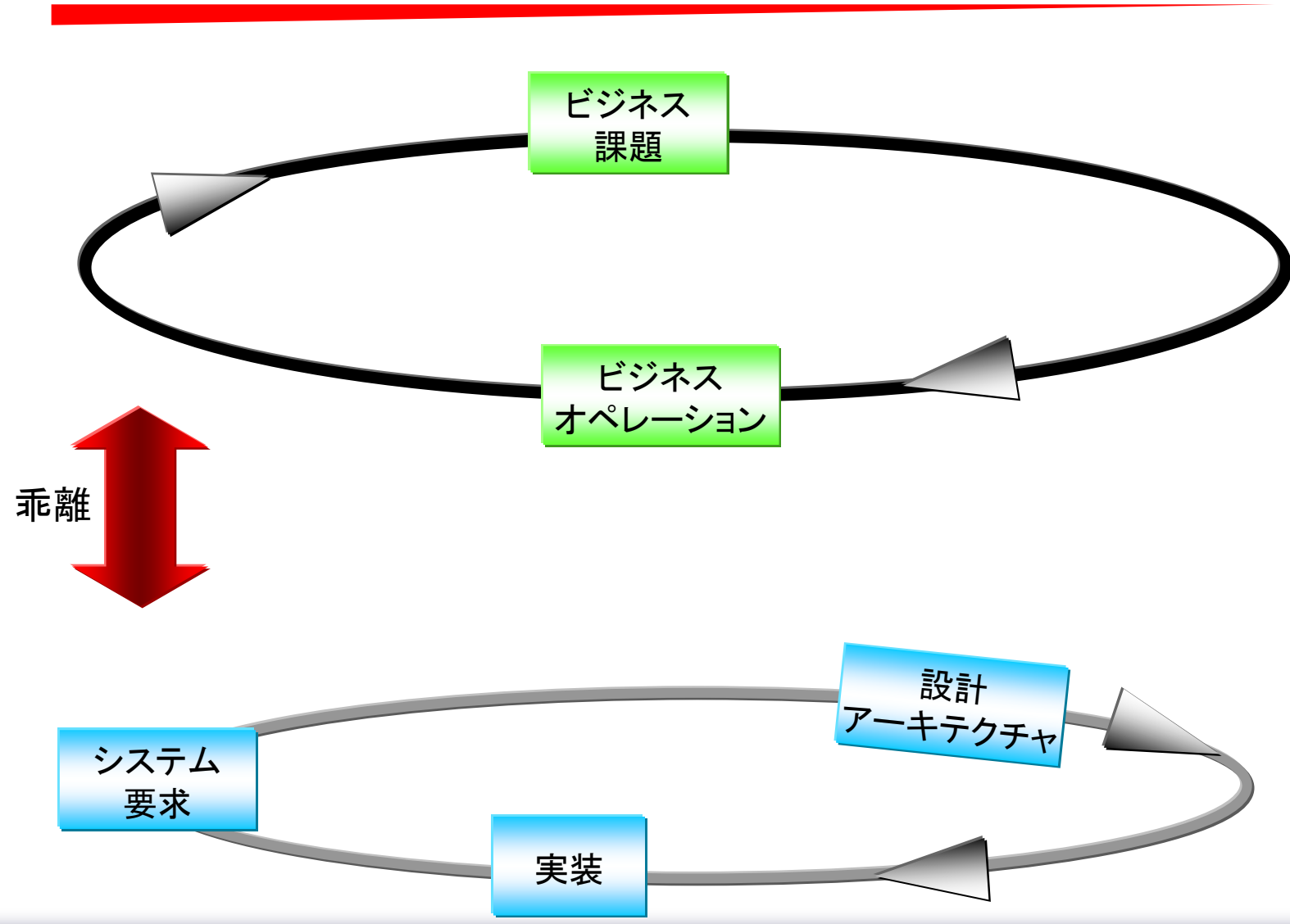
- 要求開発タスクフォースは、あくまで仮メンバーとします。従って少人数で意思決定をスピーディに行えるようなキーマンだけの組織です。正式な、要求開発タスクフォースは、本プロジェクトの活動をステイクホルダー間で合意を得た後に決定します。

■ ターゲット分析(4)

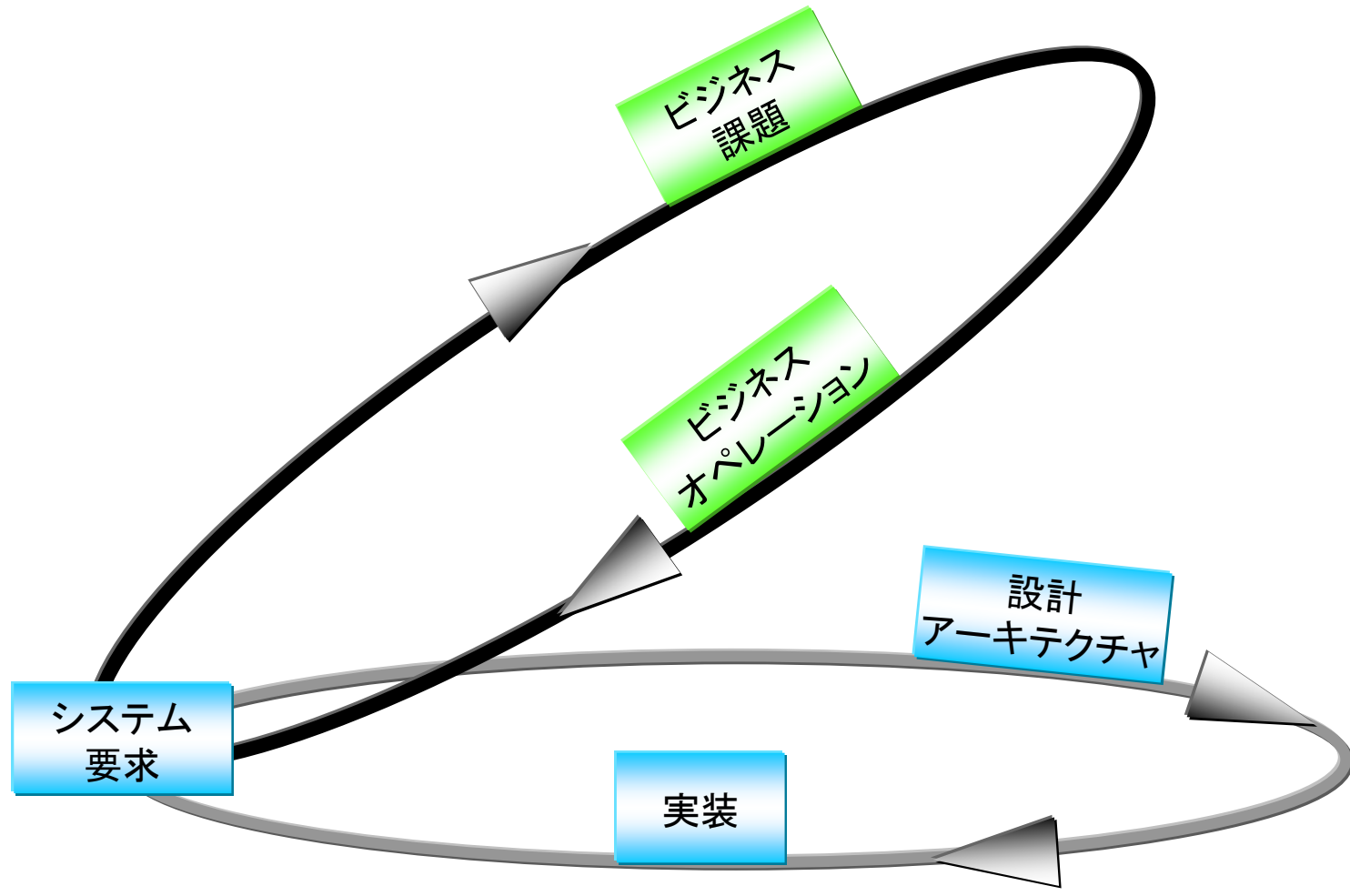
- サブ・アクティビティのワークフロー



現状

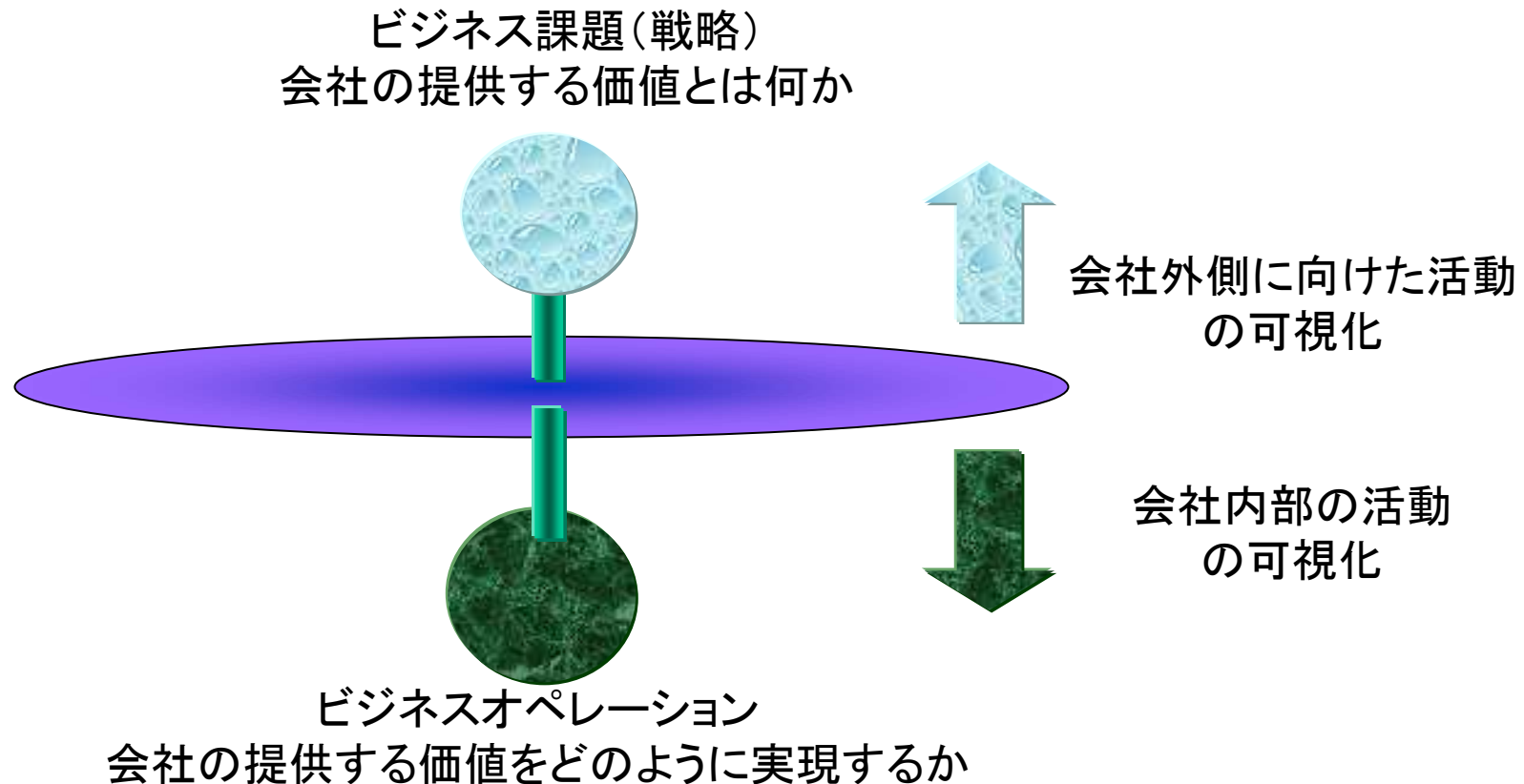


要求開発

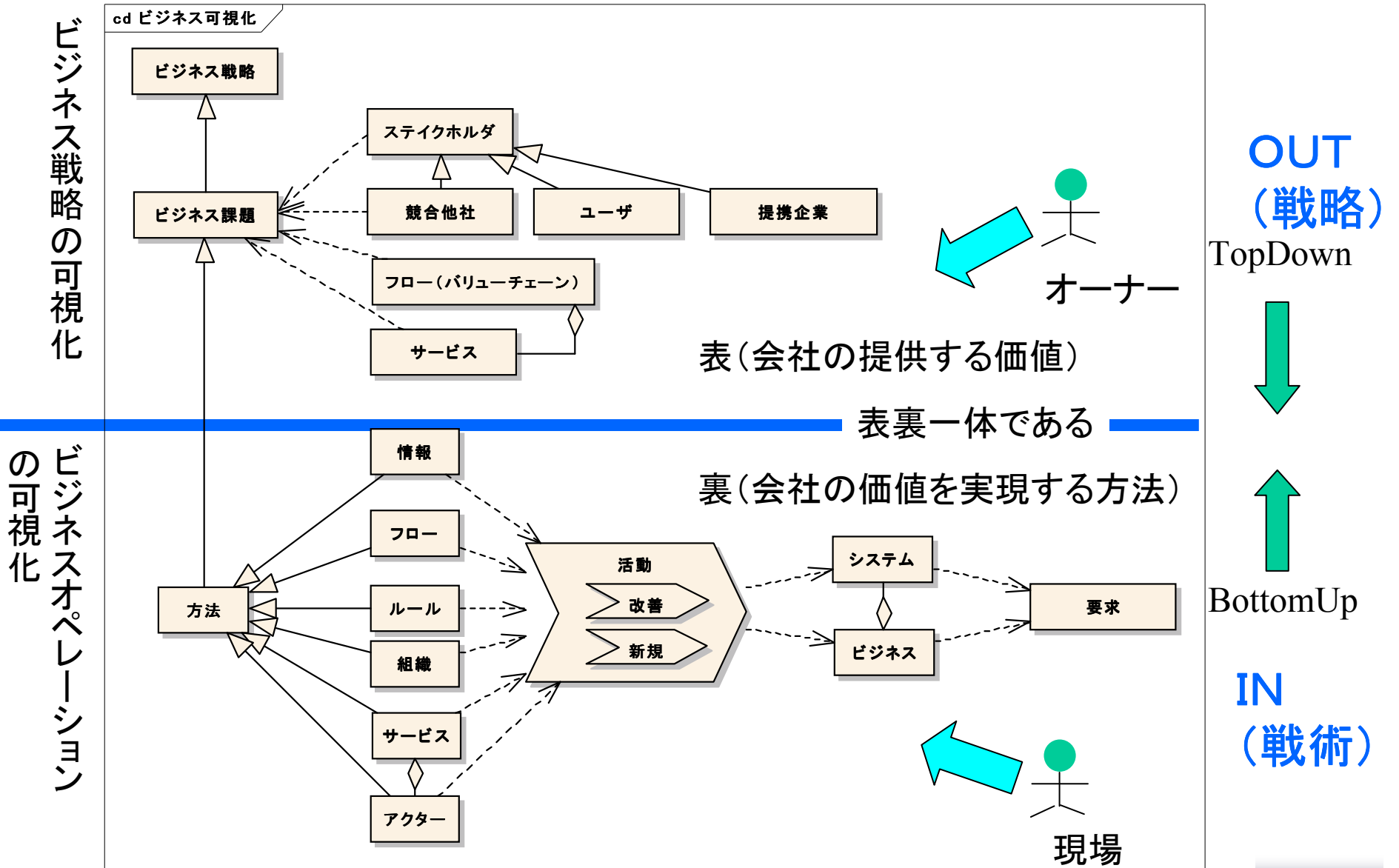


ビジネスを可視化する際の対象領域

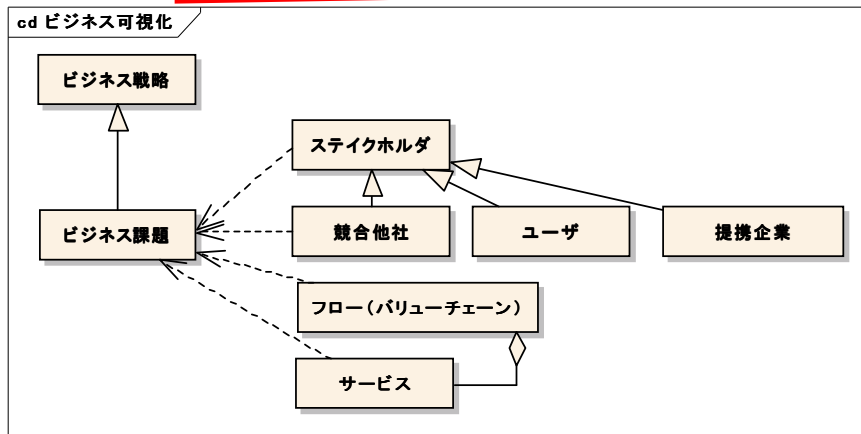
- ビジネス課題とビジネスオペレーション



ビジネス可視化の構成要素と要求の関係



ビジネス戦略の可視化

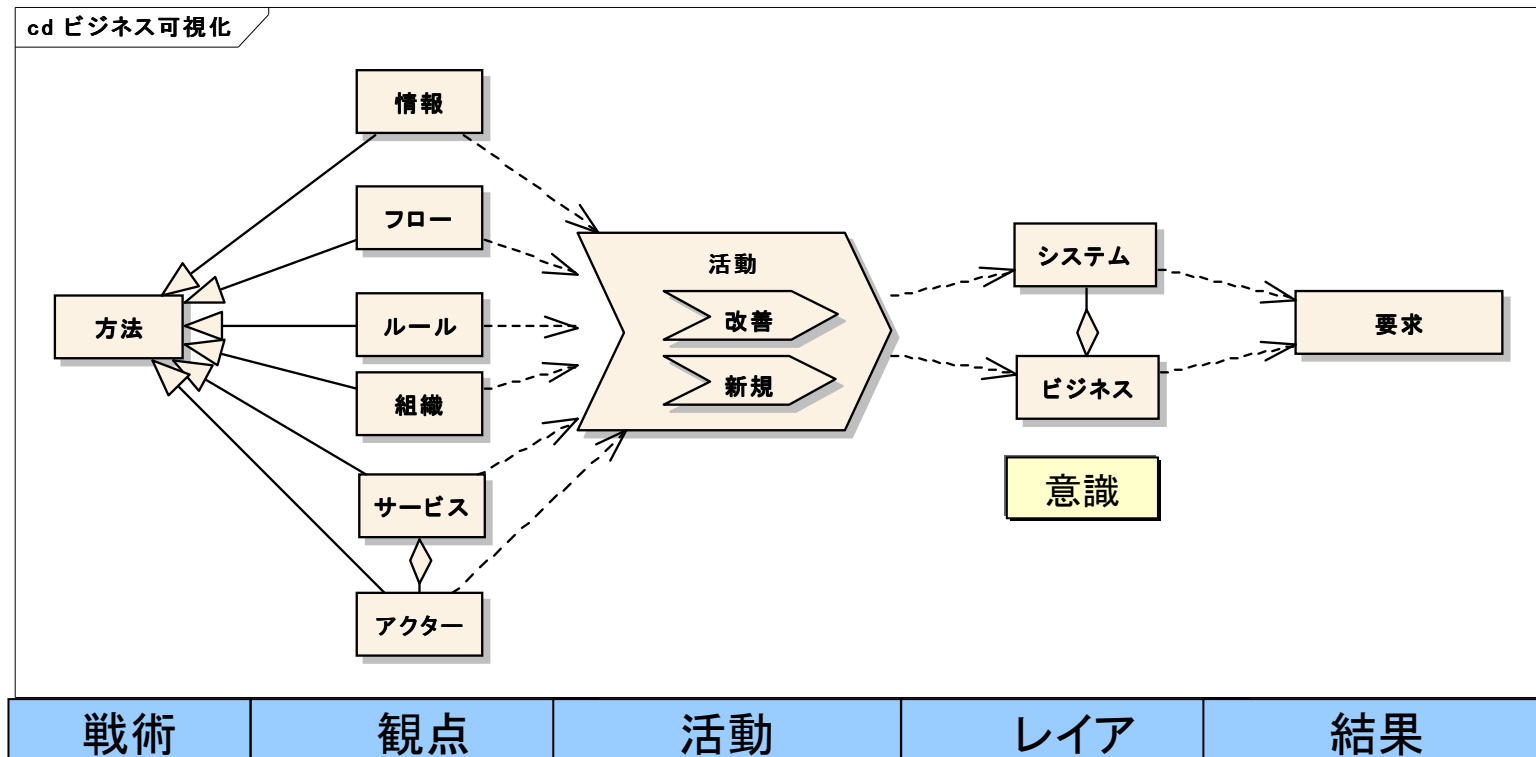


- 可視化の目的
 - ビジネス価値の維持と向上を実現する戦略について、関係者の中で合意理解する。

- ビジネス戦略
 - ビジネス価値の維持と向上を十減するための戦略
- ビジネス課題
 - ビジネス戦略を実現する上での、具体的なアイデアの仕組み
- ステイクホルダ
 - 競合会社、ユーザ、提供企業、それぞれの関心事と役割および特性を分析する。
- フロー(バリューチェーン)
 - 企業同士の連携によってビジネス価値を高めているケースでは、その連携の中で取り交わされる処理や情報の流れをフローとして捉える。
- サービス
 - 企業がどのようなサービスを誰を対象に提供しているかを明らかにする。

ビジネスオペレーションの可視化と要求

課題：要求の出元を明らかにする(トレース可能にする)



例えば「フロー」の「改善」を行う結果、「システム」に対して出た「要求」

・フロー改善システム要求

例えば「ルール」を「新規」に定義するために、「ビジネス」に対して出た「要求」

・ルール新規ビジネス要求

ビジネスオペレーションの可視化と要求

それぞれの観点はOpenthologyのモデルに対応

- 情報モデル(概念構造とデータ構造に着目)
- プロセスモデル(動的なフローに着目)
- サービスモデル(内部のサービスに着目)

